

令和7年度 ソニー幼児教育支援プログラム保育実践論文

段ボール島へようこそ！

～子ども主体の協働的な学びを未来へつなぐ～



宮崎県延岡市立西階幼稚園

目次

I	はじめに.....	1
1	本園の考える「科学する心」の捉え.....	1
2	本園の「科学する心」を育てるイメージ図.....	2
II	研究の仮説.....	3
III	研究方法.....	3
IV	実践報告 『段ボール島を作ろう』（段ボール遊び）.....	4
	【事例1】段ボール“じま”のほうがかっこいいよ！.....	4
	【事例1-2】会議の名前は“島会議”がいい！.....	5
	【事例2】ナイスアイデア！.....	5
	【事例3】あ、これいけるかも。.....	6
	【事例3-1】でもそれ難しくない？.....	7
	【事例3-2】ねえ見て！星みたい！.....	7
	【事例4】普通の裏口は嫌だ。.....	8
	【事例5】音が鳴る時計台がいい！.....	9
	【事例6】じゃあ、かかしをつくろう！.....	10
	【事例7】段ボール島のCMをつくりたい！.....	10
	【事例7-1】全員そろってCM撮影！.....	11
	【事例7-2】段ボール島へようこそ！.....	12
	実践報告「段ボール島をつくろう！」を振り返って.....	12
V	今年度の子どもたちの様子（小学校との連携）.....	13
VI	全体考察.....	14
VII	今後の方向性.....	15

I はじめに

本園は、延岡市の目指す子ども像「^{こころ}幸動～自他の幸せのために学び行動する子ども」のもと、「豊かな心・たくましい体・生きる力」を教育基盤とし、心豊かで、たくましく、主体性のある幼児の育成を目指している。今年度の研究主題は、昨年度に引き続き『やる気・勇気・元気～子ども主体の協働的な学びを深める保育の在り方～(2年次)』として、研究をすすめている。宮崎県延岡市唯一の公立幼稚園であることや、全園児で32名という少人数保育の強みを探り、本園だからできることを意識して日々の保育にあたっている。令和5年度から「科学する心を育てる」ことをテーマに論文を書き続け、今年度は3年目になる。昨年度の論文の講評で、「探求が直線的」という言葉があった。この言葉が大きなキーワードとなり、実践を振り返るきっかけとなった。その中で、保育を捉える視点の違いなどの様々な課題点が出てきたことから、今年度は“子どもの心を深く読み取る”ことに重点を置いて研究をするという目標ができた。今回の論文で紹介するのは、昨年度の論文の約4ページに詰め込んだ「段ボール島をつくろう!」という年長児クラスの実践である。再度、実践を振り返ることで、今年度だからこそできる見方があると感じたことから、新たな視点で実践のはじまりから考察しなおし、研究したことを紹介していく。

1 本園の考える「科学する心」の捉え

「科学する心」とは何か。令和5年度に職員で協議し、本園では、活動を通して驚きや感動を繰り返し味わわせて育む「豊かな感性」、そして、様々な人・もの・出来事に興味をもたせ、夢中にさせて思いや発想を広げ、創造させていく「創造性の芽生え」を「科学する心」と捉えて研究をスタートした。令和6年度は、「協働的な学び」に着目し、遊びの中で子どもの「やる気・勇気・元気」を引き出し、学びに繋げていくことが「科学する心を育てる」に繋がると考えた。そこで今年度は、過去の研究をより深めるために、子ども主体の協働的な学びから育つ「科学する心」の動きを丁寧に考察しながら事例研究をすすめていくことにする。そして、この「科学する心」を小学校はもちろん、未来に繋げていくにはどうすればよいのか、という視点も大切にしていきたい。

これまでの「子ども主体の協働的な学びを深める保育の在り方」の研究を通して、今年度は「科学する心の育成」を次のように考える。

① 「遊びは環境から」

子どもの遊びは環境から編み出される。子どもが安心して自分を発揮できる環境で、様々な「こと」「もの」に出会い、「すごい!」「ふしぎ!」という発見をして感動体験に繋げていく。その中で想像や世界を広げて、試行錯誤を繰り返し、遊びを深めていく。「それで遊びたい」「そこで遊びたい」と思える魅力的な環境設定が子どもの心を動かし、主体的な遊びに繋がる。

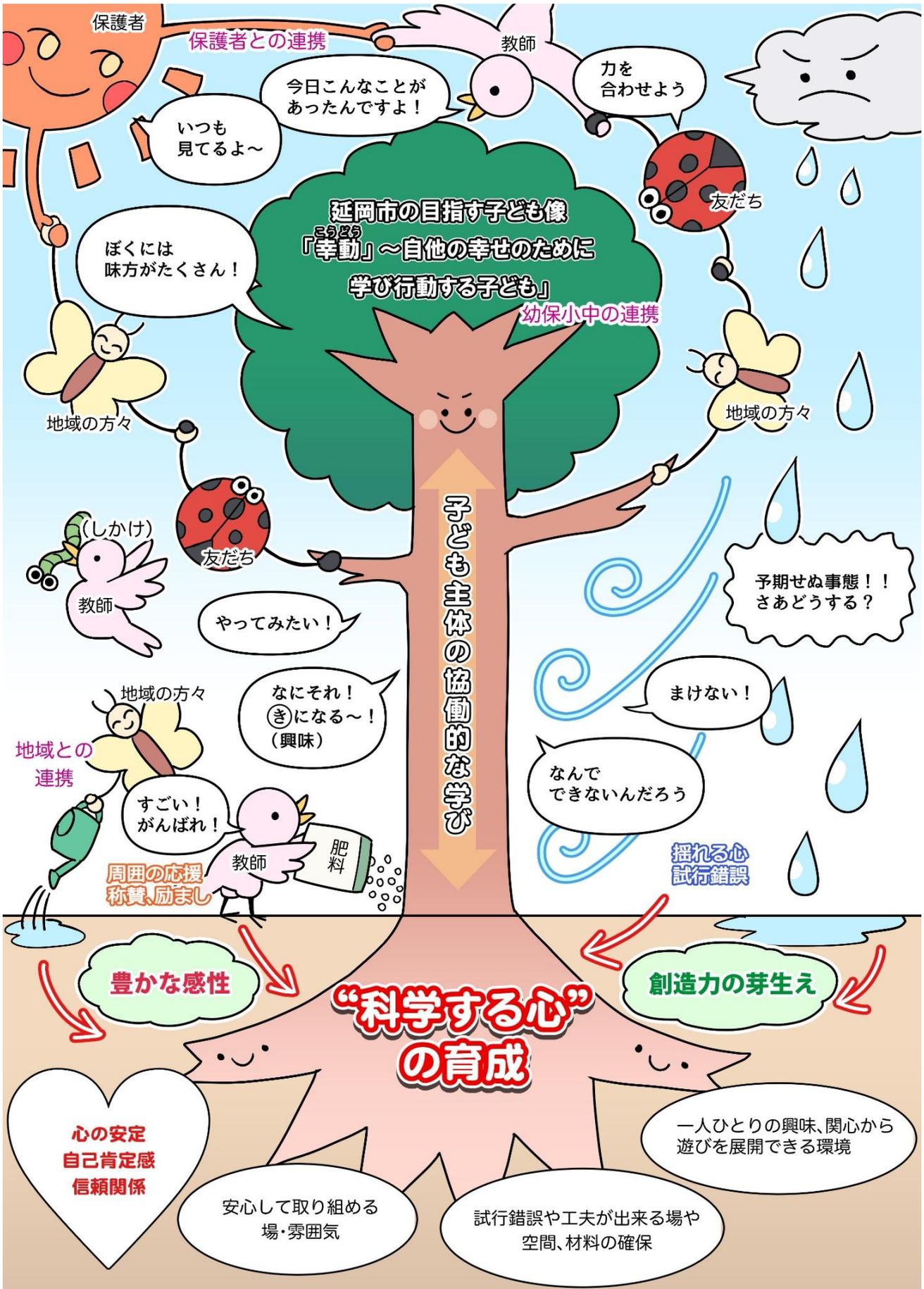
② 「他者とのかかわり」

周囲の友だちや教師、保護者や地域の方々など園生活では様々な人とかかわる。また、人だけではなく、虫などの生き物にも思いを巡らせながら、命の大切さも学んでいく。そのかかわりの中で、自分とは違う意見に出会うこと、一人では実現できなかったことが実現することなどを経験していく。だからこそ、「なぜ?」「気になる!」「もっと知りたい!」「やってみたい!」という気持ちがさらに芽生えてくるのだと考える。時には、予期せぬ事態が起こって心が揺れる時もある。失敗や挫折を経験するかもしれない。そのようなときこそ、周囲の応援や称賛、そして励ましが、さらに子どもが突き進む原動力になる。そして、「自分には味方が沢山いる」と実感させることが、子ども自身の自己肯定感となり自信となる。

この2つが相互に作用し合うことで、感じたことを自分なりに生き生きと表現する姿(豊かな感性)や、失敗を恐れずに自分で考えて探求する姿(創造力の芽生え)に繋がるのではないだろうか。そして、このような環境からの刺激と他者との対話・共感が掛け合わされる活動や体験を繰り返すことが、幼児期の「科学する心」の育ちにつながると考える。そのイメージをで表した。

2 本園の「科学する心」を育てるイメージ図

図1



II 研究の仮説

幼児は、他者との協働的なかかわりを通して主体的に問いを立て、試行錯誤しながら身の回りの事象を理解しようとする姿が見られる。したがって、幼児の興味や探求心を引き出す環境の構成と、他者とのかかわりの両面からの支援が、科学する心を育てることにつながるだろう。さらに、こうして育まれた科学する心は、段階的かつ連続的な教育のつながりを意識することで、幼児期以降の学びや将来の探求的な姿勢にもつながっていくだろう。

III 研究方法

1 「環境」・「他者とのかかわり」における工夫の分析

実践事例から「環境」と「他者とのかかわり」の工夫を読み取り、「科学する心」との関連性について考察を行う。

(1) 「環境」の工夫とは

「環境」の工夫とは、子どもが主体的に安心して遊びを展開できるよう、視覚や感覚に働きかける場の設定を工夫することである。

例) ① 園児の手が届く場所に、空き箱などの廃材を入れる「もったいないワゴン」を設定し、いつでも利用できるようにしている。



② 遊びの後の片付け方法を工夫し、「また明日も続きをしよう」という子どもの思いが持続する遊びの空間を設定する。これにより、子どもは継続的に遊びの展開を図ることができる。



(2) 「他者とのかかわり」の工夫とは

「他者とのかかわり」の工夫とは、子ども同士・教師・保護者・地域の方々など、様々な人や生き物とのかかわりによって、興味や思考がより深まり広がるように工夫することである。

例) ① 自分の意見やアイデアを発表する場や、クラス全員で話し合う場を設定し、情報を共有することで子ども同士で影響を受け合いながら意欲を高められるようにしている。また、他者から認められることは自信にも繋がり、豊かな感性も引き出せる。



② 子どもの感性を一層豊かにするには、子どもを取り巻く身近な大人たちにも協力依頼することが大切だと考えている。保護者によるリサイクル活動について考えたり一緒に取り組んだりする活動や、地域の方々の協力による芋作り、高齢者との交流遊びなどを充実させることで、子どもたちに新たな気づきや学びが育まれていくことが期待される。



2 小学校との連携に基づく実践の展開

本園では、隣接する延岡市立南方小学校の児童との交流活動として、芋の苗植えや芋掘り、クリーン作戦など多様な体験的学習を実施している。また、小学校の職員研修に幼稚園職員も参加するなど、教職員間の連携も積極的に行われている。本研究では、対象となる子どもたちの卒園後の様子や「科学する心」の育ちを把握するために、小学校視察を行い、子どもたちの活動の実際を小学校職員と共有していく。これにより、幼児期の経験が小学校での学びにどのように影響しているかを検証する。

<具体的な方法>

- ・小学校1年生授業の視察
- ・昨年度実践報告の共有および情報交換
- ・小学校教員アンケート結果に基づく本園の成果・課題の整理



IV 実践報告 『段ボール島を作ろう』(段ボール遊び)

5歳児(ぱんだ組) 令和6年4月～11月

※ 環境 他者とのかかわり 心の動き

「段ボールで何か作りたい」とA児が言い出したのは、進級して間もない4月12日。「ぼくも!」「私も!」と仲間が増えて、それぞれが作った沢山の段ボールの家が“ふれあいホール”に並べられた。それを見ていた他の子どもたちも次々と家や車を作り、クラス全体で段ボール遊びがブームになった。

【事例1】段ボール“じま”のほうがいいよ!(令和6年4月30日)

段ボール遊びは段々と家づくりに変化していった。1人で家を作る子、2~3人で家を作っているグループもいる。その中で「ねえねえ、みんなの作った家を合体して一つにせん?」とB児が提案した。理由は自分の家が狭く感じてきたということだった。その案に、C児は、「え~合体すると?(家が)狭いなら新しい段ボールを足せばいいやん」と乗り気ではない。この2人のやりとりを見守っていた教師は、子どもたちを集めて全員の意見を聞いてみることにした。



するとやはり、「せっかく作った家を少し壊して、他の人の家と繋げるってことやろ?やっぱり嫌かな」「自分の家は自分の秘密基地だもん。絶対壊したくない!」という意見が子どもたちの中から多く出た。そのとき、A児が「じゃあ、みんなで街を作ったらどう?」という新たな提案をした。

その意見に子どもたちの表情が輝き、全員が大賛成。合体派だったB児も「いいね!」とそのアイデアにのった。

C児「じゃあ宮崎県延岡市、みたいに、段ボール県 段ボール市にしよう!」

D児「うーん、それもいいけど島にするのはどう?海や魚が作れるし!」

C児「いいね!それなら段ボール島だ!」

E児「段ボール“しま”じゃなくて段ボール“じま”のほうがいいよ!」
こうして話し合った結果、ぱんだ組全員で力を合わせて「段ボール島」を作るようになった。



<考察>

それぞれが作ったもの同士を集めて集合型の世界を選択した子どもたち。誰かが作ったものと自分の作ったものを物理的に合体させる工程を想像し、自分が作った物に手は加えてほしくないが、それぞれが作った物が“集合”して一つの世界になることに子どもたちは期待を膨らませたのだと推察する。最初、作ったものを合体することを提案したB児。クラス全員での話し合いで、合体はせずに集合型にしたいという意見が飛び交う中、B児は予想以上に他児の意見に賛同していた。その姿は、集団の力に流されて“仕方なく”という姿ではなく、心から段ボール島を作ることを楽しみにしているようだった。特に、個人での作品づくりに強い関心を示していたB児だったので、さらに遊びを広げるために、周囲の子どもたちとのかかわり合いを求めているのだろう。

【事例1-2】会議の名前は“島会議”がいい！（令和6年5月2日）

子どもたちが口々に段ボール島のアイデアを出している様子を見て、教師は全員で“段ボール島に作りたいもの”のアイデアを出し合う場を作った。自分のアイデアを出したり、人の意見を聞いたりすることで、さらに「島」というイメージを子どもたち全員で共有していった。

（※以下、子どもたちから出た意見）



海	海で魚釣りができる場所を作りたい！
恐竜博物館	島の恐竜を展示する博物館を作りたい！
虫研究所	島の虫を研究する所を作りたい！ケースに入れた本物の虫を置きたい！
時計台	島の時間を教える時計台を作りたい！時間になったら音を鳴らしたい！
宇宙体験所	宇宙を体験できる場所を作りたい！

子どもたちの発想は次から次に出てきて、一日では終わらなかった。教師は、継続的にこの会議を続けていく必要があることを子どもたちと確認すると、D児がすかさず「島の会議だから会議の名前は“島会議”がいい!」と言った。これをきっかけに段ボール島について話し合うことを「島会議」と呼ぶようになった。

教師は、この子どもたちの様子を保護者に伝えるために、クラスだよりでお知らせした。そして、「大きい段ボールが必要です。ぜひ保護者の皆さんのお力を貸してください」と最後に書き記した。

そのクラスだよりを読んだ保護者の方々が、連休明けにとても大きな段ボールを園に持ってきてくださり、子どもたちは大喜びしていた。



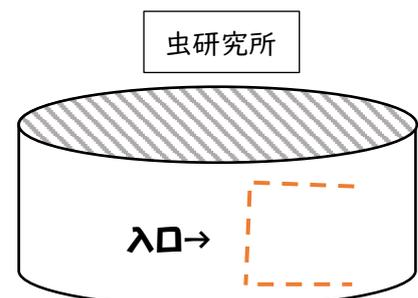
<考察>

これまでに作った作品で島を作るのだらうと予想されていたが、実際には新たに一から作ったもので島を作ろうとしている子どもたちの姿が興味深い。そして、子どもたちの中から「島会議」という名前が自然に出てきたことは象徴的であり、仲間と共に一つの世界を築こうとする気持ちを高めていた。さらに、段ボール島に新しく必要なものを思い描き、子どもたちは大きな段ボールがさらに必要だと考えた。このように、既存の作品に依存するのではなく、新しい作品を主体的に生み出そうとする子どもたちの姿からは、意欲と喜びが感じられた。

【事例2】ナイスアイデア！（令和6年5月9日）

準備物が揃い、早速段ボール島に配置する建物の制作を始めることになった。

A児とB児は、「虫研究所」の制作グループ。今まで段ボールで家を作っていた経験をもとに、大きな段ボールをガムテープで繋ぎ合わせて幅広い筒状にし、建物に見立てた。「とりあえず外枠はできたね」と満足している様子だった。外枠ができて、



内側に入るところがないことにすぐに気が付いたA児は「入口を作ろう!」とB児と協力して、段ボールカッターを使用して器用に入口を作っていく。段ボールカッターのゴゴゴと響く音につられて周囲の子どもたちも集まってきた。子どもたちが見守る中、入口が完成。ドアの開閉を確認する。「できたけどなんか開けにくい?」「いや頑張れば開けられる」というやりとりを子どもたちがしている中、B児が「ちょっと待って!」と廃材コーナーからプラスチックの容器を持ってきた。「これをドアの持つところにしたらどうだろう?」と言ってガムテープで貼り付ける。



「あ!ドアノブになったね!」「すごーい!」「ナイスアイデア!」その様子を見ていた他の制作グループの子どもたちも「真似するわ!」と次々にドアノブを作った。

「虫研究所だから、本物の虫を置く!」とA児はクラスで育てていたツマグロヒョウモン・アゲハ蝶・カブトムシの幼虫の飼育ケースを大切に持ってきた。途中から仲間に入ったC児が入口から入って研究所の何も無い内側を見渡して「研究所の中、さみしくない?段ボールの壁に絵を描いたり写真を貼ったりしたらいいんじゃないかな」と言った。その言葉をヒントに子どもたちは、段ボールの内側に幼虫の絵を描いたり、その絵の説明を文字で書いたりした。「写真はどのようにか。先生にパソコンで検索して印刷してもらおう?」とD児が言うと、「検索」という言葉にE児がひらめいた。

「そうだ、タブレットで写真を撮ればいいやん」
昨年、クロアゲハの成虫をタブレットで撮影して画像検索した経験を思い出した子どもたちは、タブレットで実際の虫を撮影し、写真にしたものを研究室内に掲示した。



<考察>

昨年度にタブレットを使用した経験を思い出し、今年度は自ら撮影・印刷・掲示へとイメージを発展させた子どもたちの姿からは、過去の経験が「生活の知恵」となって次の行動を生み出す力となっていることがうかがえる。さらに、担任を含め同じメンバーで進級したことも大きく、共通の体験や思い出をもとに、互いの考えを理解し合い、共通のつながりを形成していた。「同じ経験を共有しているからこそ通じ合える」安心感が活動を推し進める原動力となっていたといえる。



【事例3】あ、これいけるかも。(令和6年5月13日)

「宇宙を体験できる宇宙体験所」を作りたいと意気投合したD児とE児は、虫研究所を見て、同じような筒状の段ボールに入口を作り、自分たちはどうやって宇宙体験所を作るか話し合っていた。「宇宙は真っ暗だから、暗くしたい」と段ボールで作った家の中を暗くするにはどうしたらよいか試行錯誤していた。「そうだ!カーテンをつけよう!先生、幼稚園の大きい布を持ってきて!」とD児がひらめき、教師は劇用の暗幕を持ってくると、D児とE児は椅子の上に乗り、段ボールの上に覆いかぶせた。「わー!暗くなった!」と大喜び。そして2人は一時暗闇の中で遊んだ。「真っ暗すぎて全然見えない!」すると、暗幕が少しずつずれてきて、そこから顔を出せることに気づき、「先生、写真撮って!」と嬉しそうなE児。その時に段ボールの中にいたD児が「ねえ、カーテンをずらしすぎたら全然暗くならんちゃけど!」と言った。そして、また暗幕で隙間を全て覆い隠す。「やっぱり真っ暗すぎる」と暗幕を少しずらして光を入れることを繰り返し、丁度良い加減を探した。「そうだ!段ボールに小さな窓を作ったらいいい感じになるかも」と言い、段ボールカッターで切り込みを入れ始めると、真っ暗の段ボール内に光が差し込み始めた。「あ、これいけるかも」と2人の止まっていた手が動き始めた。

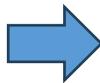


<考察>

暗闇に差し込む光に心を動かした2人は、その現象を「窓」として遊びに取り込み、繰り返し覗くことを楽しんでいた。E児の行動をきっかけにD児は光の照度の変化に気づき、互いに影響し合いながら活動を発展させた姿からは、偶然の出来事を学びへとつなげる柔軟さと、友だちとの相互作用の力が感じられる。この体験は、光や空間に関する探究心を芽生えさせる良い機会になったと考える。

【事例3-1】でもそれ難しくない？(令和6年5月17日)

次に2人が手掛けたのは宇宙体験所の屋根。「すぐ黒のカーテン落ちちゃうよね」毎回椅子に乗って暗幕で屋根を作らないといけないことをやめるにはどうすればよいか考え始めた。「もう段ボールで屋根を作った方がよくない？」とE児が言うと、「それなら、今黒のカーテンがあるところを全部段ボールにしよう！」と段ボールを円形に切って屋根にする案をD児が提案した。別の制作グループの子どもたちも興味をもって集まってきた。「でもそれ難しくない？」「確かに。普通の小さな画用紙じゃないんだから」と諦めて暗幕の屋根でもいいという意見が多い中で、ずっとD児は黙っていた。そして、「工作するみたいに鉛筆で形をとって切れればいいと思うんだけど」と呟いた。教師は、「とりあえずやってみたら？」と声をかけて見守った。大きな段ボールを下に敷き、その上に宇宙体験所を置く。そして、宇宙体験所の外周を鉛筆で形をとる。宇宙体験所が動かないように支える子どもと鉛筆で印をつける子どもに分かれてスムーズに作業をすることができた。「あとはカッターで切るだけだね」「段ボールを丸に切るのって大変すぎる」「てか、でかすぎん？」「手分けしよう」と盛り上がり、他の制作グループの子どもたちも仲間入りし、鉛筆で書いた線をひたすら切る作業に入った。教師も援助しながら円形の屋根が出来上がり、宇宙体験所の上に置いてみる。「あ、なかなかいいじゃん」「でも、すこし大きすぎたかも。こころへん(右上)の屋根がはみだしてる」そのように出来上がった屋根に再度鉛筆で形をとり、何回も切る作業をして子どもたちの納得のいく屋根になった。



【事例3-2】ねえ見て！星みたい！(令和6年5月24日)

段ボールの屋根ができたことで、さらに宇宙体験所に暗闇が作られたことから、子どもたちはさらに段ボールに切り込みを入れて窓を作り、光を差し込ませることに面白さを感じ始めた。そのとき、けんかをするような声が聞こえて、教師が見に行ってみると宇宙体験所の屋根に穴が一つできていた。「Cくんがふざけて屋根に穴をあけた」と周りの子どもたちが言っていた。C児は「ふざけていたわけじゃなくて、段ボールでできた屋根が気に入って中からカッターで屋根を叩いて遊んでいたら穴があいてしまったよ」と言う。「どうする？」「せっかく作った屋根だしガムテープで穴をふさごう！」と周りにいた子どもたちの間でそのような話になった。そのとき、E児が「ねえ見て！星みたい！」と言って、その場の空気が変わった。「なににない？」「どうしたと？」と子どもたちが宇宙体験所の中に入って上を見上げると、C児の作った穴が暗闇の中で星のように光って見えた。「星だ！」「いいやん、この穴いっぱい作ろう！」「Cくんのおかげや！」と言い、たくさんの星(穴)を作るようになった。

このことがさらに子どもたちのイメージを膨らませた。「宇宙体験所の中を全部絵の具で黒く塗ったら、もっと星み

たいに見えるかも!」「中にもライトがあると、宇宙っぽくなると思う!」子どもたちのアイデアでさらに宇宙体験所は進化していった。

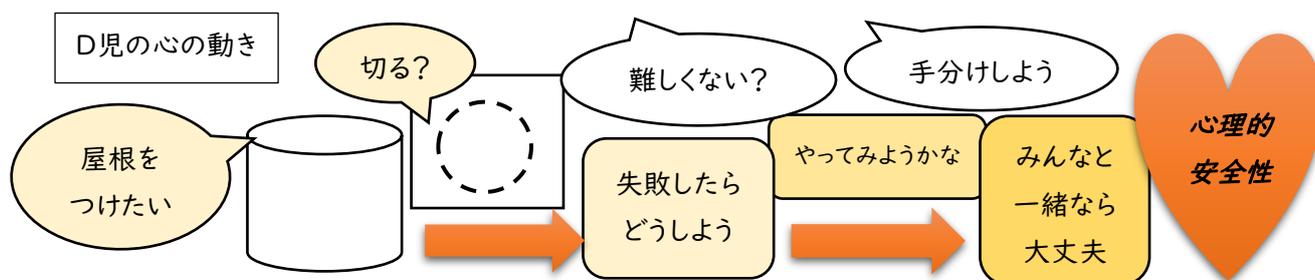


屋根にできた穴が星のように見える不思議さに心を動かす子どもたち。



<考察>

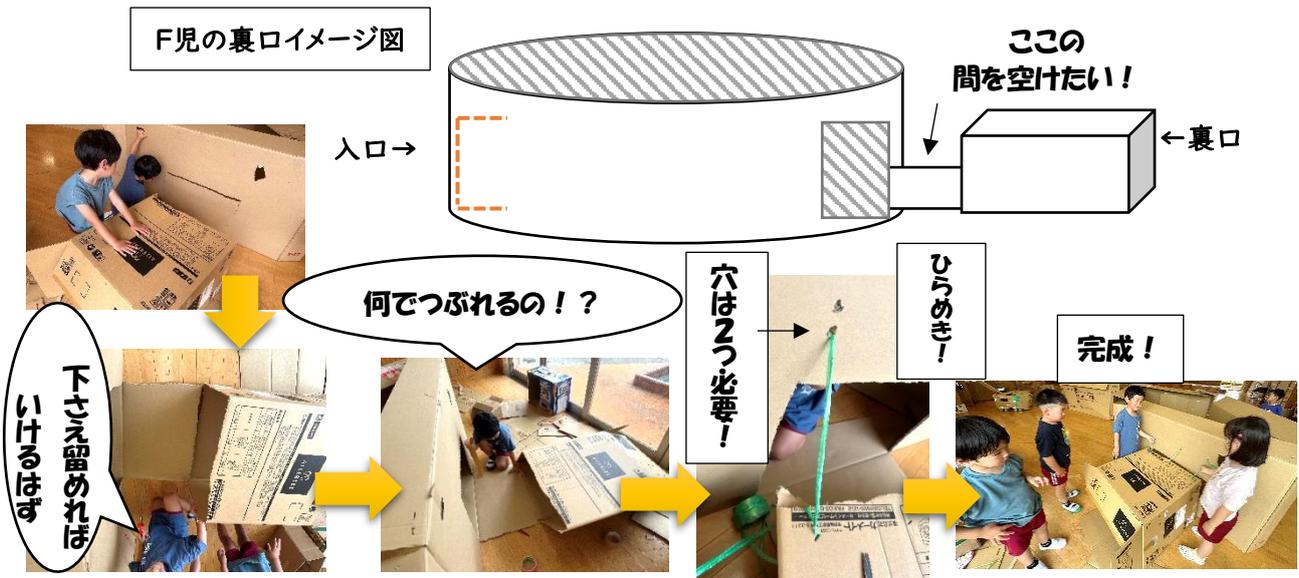
事例3-1「それって難しくない?」に出てくるD児は失敗を恐れるところがあり、難しい場面に直面すると息詰まってしまうことがある。幼児向けの安全性に配慮された段ボールカッターで曲線を切るにはコツがいる。その「難しそう」というイメージを共有した周囲の子どもたちが集まり、互いの意見を出し合って協力したことがD児の挑戦に繋がったと考える。教師も「やってみたら?」と声をかけ、背中を後押しした。子どもたちは、切りやすい切り方を模索する中で、縦方向から少しずつ斜め方向に細かく刻みを入れるように切る曲線の切り方を考案した。試行錯誤ののちに円形の屋根が完成したとき、子どもたちはとても喜び合った。「みんなと一緒に大丈夫」というD児自身の自信に繋がった出来事だった。また、段ボールでできた暗闇に隙間や穴があると光が差し込むことを学んだ子どもたちは、その経験をもとにC児が作った屋根の穴からも光が差し込むのではないかと考えることができたのだと推測される。C児の意図的ではなかった行動から新たな事象を発見し、周囲の子どもたちも思考を深めるきっかけになったと感じた。



【事例4】普通の裏口は嫌だ。(令和6年5月27日)

恐竜が大好きなF児とG児は「恐竜博物館」を作ることにした。大きな段ボールを筒状にして外枠と入口を作ったところからスタート。他の建物も大体同じ形になってきており、博物館だけの独自の形にしたいと感じたF児が「恐竜博物館は裏口を作ろう!」と言い出した。

「でも普通の裏口は嫌だから、ちょっと間が空いていてトンネルみたいな裏口がいい!」と言い、イメージを周囲に伝えて制作開始。トンネル部分の段ボールが何度も横に潰れ、「何で!?!」と試行錯誤をするF児。周囲の子どもたちも手を貸したいけれど、どうしていいかわからない様子だった。教師がトンネル部分を持って手を離すと潰れることを伝えながら、「この状態にするにはどこを留めたらいいんだろうね」とヒントを与えた。「何か紐が必要!」と素材をひらめいたF児は、すずらんテープを持ってきた。試行錯誤の結果、「両方の段ボールに穴をあけて、互いをすずらんテープで結んだ方が頑丈」だとG児が気づき、周囲の子どもたちも様々な意見を出し合った。完成形はイメージ図とだいぶ違う形になったが、裏口が完成したことに大満足のF児だった。



<考察>

恐竜博物館を作ったF児はこれまでの知識の中で建物には“裏口”があることを知っており、とても興味をもっていた。当初、周囲の子どもたちは裏口の必要性に強い関心を示していなかったが、F児の提案をきっかけに少しずつ会話が生まれ、「こっちのほうがいいんじゃない?」と互いの考えを出し合うようになった。やり取りを重ねる中で、「F児の考えが全てではない」と気づきながら、さまざまなアイデアを取り込み、形を調整していく姿が見られた。その結果、最初のイメージとは異なる形となったものの、子どもたちは話し合いを通して自分たちなりの最適な形を見出し、裏口を完成させることができた。このように仲間と世界観をすり合わせながら完成させた経験は、子どもたちに達成感をもたらすとともに「一緒に考えれば新しいものが生まれる」という実感にもつながったと考えられる。

【事例5】音が鳴る時計台がいい! (令和6年6月5日)

「段ボール島は無人島って設定やから、時間を知らせる時計台は絶対いる」とH児は張り切っていた。「時計台って何?調べんと分からん」という子どもが多く、島会議の中でタブレットを使用し時計台の写真を調べてイメージを共有する時間を作った。話し合いの結果、段ボールを積み上げる作戦で制作に入った。

そして、前回の島会議で「音が鳴る時計台がいい!」という意見があった。それを実現するためにはどうすればよいのか議論になった。「鐘を作って叩いて鳴らせばいい」という意見もある一方で、「小学校みたいなチャイムがあればな〜」とI児が言った。チャイムの音を鳴らしたい気持ちがあるが、どうやって時計台からチャイムを流すか全員で悩んでいると、「録音したらいいんじゃない?」「あ、うちのお母さん、録音はスマホのカメラでしていたよ!」という小学校のチャイムを録音して流すアイデアが子どもの中から出た。そのアイデアを試すのに必要なことは、「小学校のチャイムが鳴る時間を確認すること」と「その時間の前に小学校の校庭にクラス全員がタブレットの準備をして集合していること」ということが明確になり、島会議の多数決で「やってみる」ことになった。録音する時間は、小学校の3校時が終わる11時5分のチャイム。子どもたちはその5分前に小学校の校庭に集まりタブレットの動画撮影機能を使って全員で隣の小学校の校庭でチャイムの録音をした。まず、きちんと録音できているか確認する。“再生”をタップすると流れたチャイムに「やったー!」という声があがった。「島のご飯を食べる時間になったらこの録音したチャイムを流そう!」と満足そうな子どもたちだった。



<考察>

時計台の写真を見ながら、子どもたちは「高い」「細長い」というイメージを共有し、いくつかの段ボールを積み上げるとい手法を使って時計台を表現していた。この頃から、子どもたちは自分たちでやりたいことを島会議で話し合うたびに、やりたいことを実行するためには、どのような手順で何が必要なのか自然と自分たちで考えることができるようになっていた。また、「録音するときは静かにしてね」と子ども同士で確認し合いながら、チャイムを録音するという共通の目的に向かって、気持ちを一つにしているように感じた。自分たちなりに考えて試してみた今回の活動で、予想した通りチャイムを録音することができたことが、子どもたちの大きな成功体験に繋がった。子どもの“こうしたい”を叶える1つの方法としてICT機器の有効性を感じた。

【事例6】じゃあ、かかしをつくろう!(令和6年6月17日)

教師は、子どもたちの遊びが継続的に展開できるように、ふれあいホールに子どもたちが作ったものを置く空間を確保していた。その場所でハプニングが起きた。段ボール島に興味をもった年少児が勝手に入って触ってしまったらしく、いくつか壊れてしまっていた。それを知った子どもたちはすぐに島会議をすることにした。

「遊んでもいいっちゃけど、壊さんでほしいよね」

「年少さんだから仕方ないかあ、わかった!“こわさないで”って看板を作ろう!」

「年少さんってひらがな読めるか分からんよ?」

これ以上考えられないという雰囲気になったときに、E児が「じゃあ、かかしをつくろう!」と発表した。「え?」という声が多い中、「畑とか大事なものをかかしは守ってくれるんだ」とE児は続けた。「賛成!」と手が挙がったのは、クラスの中でごく一部の子どもたちだった。

「工作のロボットを作るみたいに牛乳パックと空き箱で作ればいいんじゃないかな?組み合わせよう!」

「うーん、組み合わせたけど、なんかリアルじゃない気がする。もっと本物っぽいかかしを作りたい!」

教師は、「かかしを作るようになったこと」と「作り方で試行錯誤していること」をクラスだよりで保護者に共有した。

「みんな!お母さんと作り方を調べてきた!本物の服を着せたらどうかな〜」

「ぼくも家で調べた!顔は“へのへのもへじ”って書くだって」

保護者の協力もあり、かかし作りに取り組む子どもが増加し、さらに大きく展開された。



<考察>

段ボール島が年少児に壊されたことをきっかけに、子どもたちの中から「かかしを作ろう」という発想が生まれた。この発想の展開を受けてクラスだよりでかかしのことを書いたところ、保護者が家庭で話題にしてくれる姿があった。家庭で得られた情報を子どもたちは仲間に伝えたり共有したりしようとするようになり、互いに刺激を受けながら興味を広げていった。当初はかかしに関心の薄かった子どもも、他者とのかわりによって関心が高まり、活動に参加する姿が見られた。また、「怖い顔にしたら年少児は触らないのでは」といった意見が出るなど、課題をどう解決するか仲間と一緒に考える姿も印象的であった。こうした姿は、子どもたちの問題解決力が発揮されている場面であるといえる。

【事例7】段ボール島のCMをつくりたい!(令和6年6月19日)

段ボール島作りが完成間近になった頃、再び島会議が開かれた。

D児の提案をクラス全員に周知するためだった。

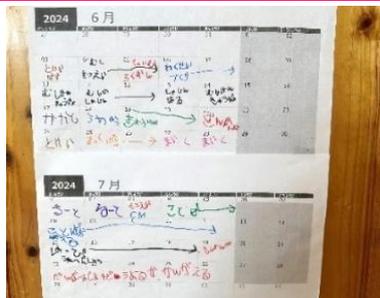
「段ボール島のCMを作りたいです!」



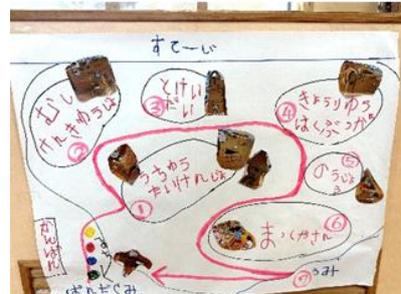
D児がそう発言すると、「おお～！賛成！」と拍手と歓声が沸いた。

そのような中、教師が「CMというのは段ボール島を紹介するためのものだと思うんだけど、誰に段ボール島を紹介したいの？」と子どもたちに聞くと、「お家の人!!」と子どもたちは即答した。

そして、「明後日の参観日で発表しようよ」とA児が言った。教師は、スケジュールを見て、ゆっくりと時間をかけて取り組みたい思いを子どもに伝え、1カ月後の7月の参観日はどうか、と子どもたちに投げかけた。子どもたちは意気揚々と「いいよ!」と言った。こうして、段ボール島のCMを作り、7月の参観日で保護者に見せることに決定した。そのための「スケジュール」や「撮影ルート」を早速全員で話し合っ作成し、クラスの前に掲示した。

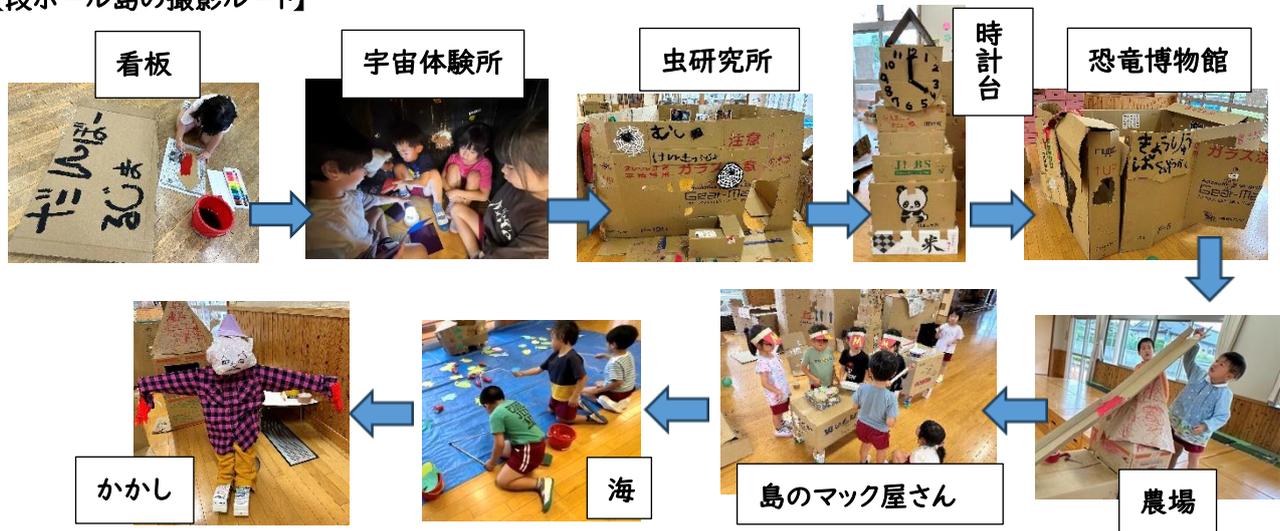


撮影までの
スケジュール
←



撮影
ルート
←

【段ボール島の撮影ルート】



【事例7-1】全員そろってCM撮影!(令和6年7月3日)

段ボール島CMの撮影日当日。子どもたちは、段ボール島の中で自分が作った最も思い入れのある場所を紹介することになった。「中継形式で段ボール島の良さを伝えたい」という子どもの意見から、取材をする役と紹介する役に分かれることになり、全員がどちらの役もできるように話し合った。

普段人前で話すことが苦手な子どもも、自分が思いを込めて作った場所のことについての話になると、言葉が止まらないほど話し続けた。撮影は、事前に計画していた撮影ルート通りに進み、最後に記念撮影もした。教師は、CM内での一人ひとりの発言を字幕化して編集し、参観日で放映する準備をした。



<考察>

子どもたちが最も段ボール島を紹介したい人は保護者だった。これまでクラスだよりや懇談会などで子どもの様子や段ボール島の進捗を伝えてきていたので、保護者の期待や関心を子どもたちは感じ取っていたのではない

かと考える。そこでCMの撮影日や上映日の予定を掲示すると、保護者が家庭の予定を合わせて協力してくれる姿も見られ、園と家庭が一緒になって活動を支えた。撮影当日、子どもたちはこれまでの活動を振り返りながら、自分たちの言葉で工夫したことや楽しかったことを伝えようとしていた。その姿は仲間との対話を思い出しながら学びを深める時間になっていたように思う。中でも、恐竜博物館を作ったG児は、言葉での表現が難しい子どもだったが大好きな恐竜を題材にしたことで、自分の経験を自分の言葉で生き生きと表現し、成長がうかがえた。

【事例7-2】段ボール島へようこそ!(令和6年7月19日)

いよいよ参観日当日。前日から「明日の段ボール島のCMを楽しみにしています!」と子どもだけではなく、保護者もこの日を楽しみにしていた。上映会は、和やかな雰囲気ですスタートした。CM内での段ボール島に対する子どもたちの思いは、子ども自身から発せられる言葉によって、さらに保護者に伝わっていた。子どもたちの発想の面白さに思わず笑ってしまう方や、子どもたちの成長に涙を流す方もいた。「すごいじゃん!」と保護者に褒められた子どもたちは、とても嬉しそうな表情をしていた。その後、段ボール島は、段ボールが自立できなくなるまで子どもたちに遊び込まれた。そして、修正不可能になったものからリサイクルすることを子どもたちは選んだ。

「次は水族館を作る!」という声もある。段ボール遊びは、まだまだ続きそうだ。



【その後の展開】(令和6年9月2日~11月13日)

2学期が始まり、運動会の練習が始まったことから、子どもたちの遊びは外で体を使う遊びやショー遊びがブームとなった。ごっこ遊びは継続して大人気。ますます何かになりきることを子どもたちは楽しんだ。6人の子どもたちがペープサート人形を作って他の子どもたちを手作りのペープサート劇場に自主的に招待する姿も見られた。

10月21日に保護者主催のお楽しみ会が行われた。異年齢の5~6人でグループになり、保護者が店側に立ち、射的やお菓子釣りを楽しんだ。その経験が子どもたちの新たなひらめきの引き出しを増やし、クラス全体の遊びが再び変わってきた。「射的の銃を作りたい」「くじ引きを真似して作ってみた」という声が聞こえ始め、廃材コーナーに群がって創作意欲を高める子どもたちだった。そのような中で、F児がひらめいたように、発言した。「ぼくたちもお楽しみ会をする人(店側)になりたい!」その言葉に沢山の賛同者が出た。「もも組(年少)さんを招待しようよ」「じゃあ、いちご組(年中)さんに手伝ってもらおう」等、様々なアイデアと意見が出てきた。

年長児は、自分たちで年中児を巻き込んで会議を開き、年少児向けに提供する活動を企画。年長児は段ボール島の経験を生かして、段ボールの扱い方を年中児に教えながら、水族館・お化け屋敷・ケーキ屋さん・射的・玉入れコーナー・乗り物コーナーを制作し、11月13日に『もも組さんを楽しませよう大作戦』という名称で年少児を会に招待し、年長児と年中児で役割分担をしてコーナーを運営した。「ぼくはずっと水族館が作りたかったんだ!」とG児は年少児に満足そうに伝えていた。

実践報告「段ボール島をつくろう!」を振り返って

○ 人と人が繋がる保育を目指して

この実践の最初にさかのぼると、子どもたちは、それぞれが作ったもの同士を合体することを拒んでいた。その時期の子どもたちは、「人は人、自分は自分」というような周囲に興味を示さない姿が園生活の中でもよく見られており、予想通りの反応だった。そのような子どもたちが「島を作る」ということを自分たちで決めて、共通の目的に向かって協力し合ったことで、友だちの良さ、仲間の大切さを実感として学んでいった。そして、段ボール集めに協力して下さった保護者・地域の方々に感謝する姿も見られた。このような他者とのかかわりによって、より心を広げ、思考を深めていったように感じる。

○ 子どもたちの「世界」になっていた「環境」

最終的に、物的環境・人的環境も含めて段ボール島全体が「子どもたち自身が作りあげた環境」になっていた。教師の支援として環境構成が大切であることは前提としてあるが、子どもたち自身が“作りやすいように”“動きやすいように”と自分たちで動線を考えて、材料・道具・作品の配置など“自由自在に扱える環境”を提供することが子ども主体の保育に繋がると考える。また、「失敗しても大丈夫」という安心感のある雰囲気（心理的・情緒的環境）も子どもたちにとって重要だった。「島会議」という自分の意見を言える場も子どもたちの意思でいつでも開けるようにしていたことから、自分の気持ちを表現し、他者に向けて発信する経験を積み上げていったことが最終的にCM撮影での子どもの生き生きとした言葉に繋がった。そのような姿を上映会のときに保護者に認めてもらえたことで、子どもたちは大きな達成感と満足感を味わうことができた。

○ これまでの経験をもとに発展した遊び

段ボール島のその後の展開として、子どもたちはこれまでの経験をもとに、年中児と協力して年少児を対象にお楽しみ会を企画した。事例6の『じゃあ、かかしをつくろう!』で、年少児から作ったものを壊された時の島会議では、年少児を敵視するような子どももいた中で、この企画が意見として出てきたことは、とても興味深かった。運動会などの行事をはじめ、異年齢とかかわった経験を通して、年長児としての役割を知り、自分たちの力で年少児を喜ばせたいと感じたのだと推察する。段ボール島で味わった成功体験が自信となり、子どもたちの心に印象深く残ったことで、この活動の展開に繋がったのだろう。

V 今年度の子どもたちの様子（小学校との連携）

◆1年生の授業視察（令和7年7月14日）

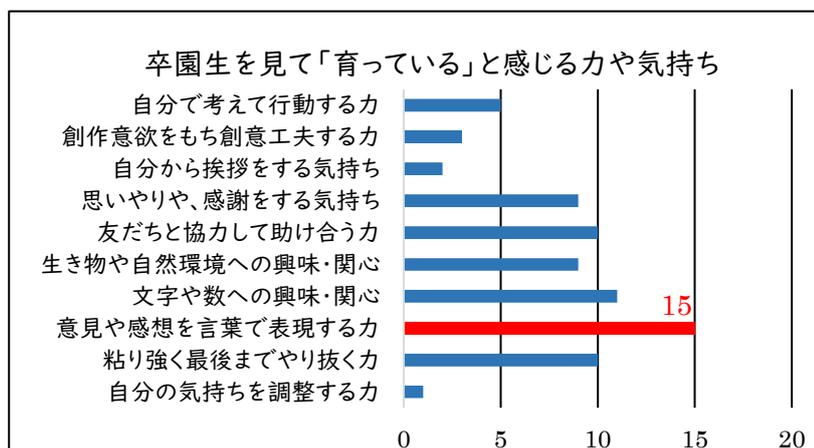
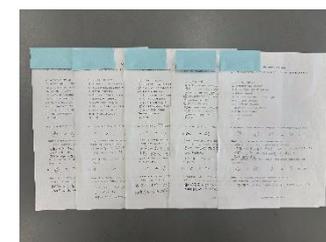
今年度、小学1年生になった子どもたちの様子を見るため、園に隣接する延岡市立南方小学校（昨年度の年長児の半数以上が入学）に視察に行った。

授業の中では、教師の問いに対し、積極的に自分の考えを発言する子どもたちの姿が見られた。特に嬉しく感じたことは、学習を“自分ごと”として捉えて授業に参加していたこと、そして、自分の考えや気づきを言語化して他者に伝える姿が見られたことである。この2点は、保育の中でも重要視してきた部分であり、対話的な学びの土台になっていると感じた。



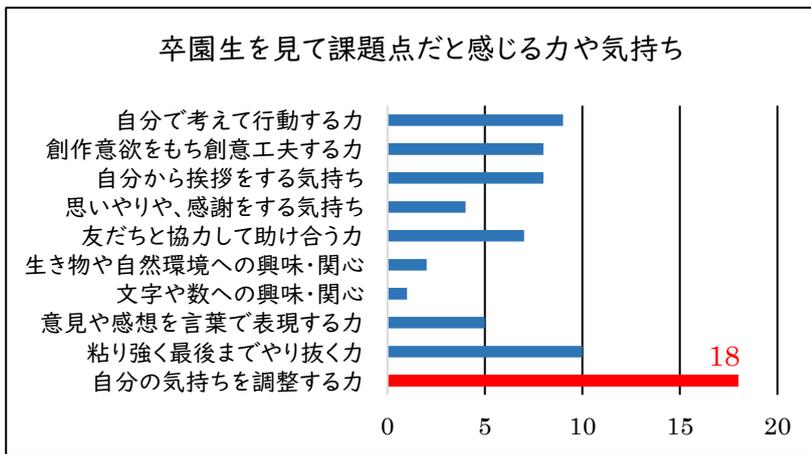
◆1年生の担任にアンケート回答を依頼

アンケートは、4クラスの1年担任・特別支援教諭の5人の先生方に協力を依頼した。内容は、本園の卒園生を見て、「育っていると感じる力や気持ち」、「課題点だと感じる力や気持ち」について答えてもらうものである。10項目の中から5つ選び、1位から5位まで順位をつけてもらった。その順位に応じてポイントを付与し、数値化した結果を、以下に示す。



※以下抜粋

- ・困ったことがあると自分で伝える。協働学習では友だちを助ける姿が見られる。
- ・外での活動では、昆虫や植物に興味をもって観察している。観察したことを絵や文ですすんで表現している。
- ・国語・算数のプリントやスキルなど、時間いっぱい頑張っている。



※以下抜粋

- ・最後までやり遂げないと気が済まないことがある。
- ・思い通りにならないと強い口調になることがある。
- ・国語や道徳などで思ったことを言葉で表現することが苦手である。
- ・図工の作品でアドバイスをしたが、それ以上取り組まないことがあった。

◆1年生の担任と情報交換(令和7年8月6日)

アンケート結果も踏まえて、1年生の担任と情報交換をさせていただいた。小学校生活の中で、うまくいかないことがあっても、諦めずに試行錯誤を重ねる粘り強さ、自然や身近な生き物に対する感性や観察力がよく育っていると感じる場面が多いというお話を聞き、「科学する心」は、小学校の探求的な学びにおいても主体的に取り組むことに繋がるということが分かった。

課題点として、アンケート結果において最も多く挙げられたのは「自分の気持ちを調整する力」の未熟さであった。これについては、本園がこれまで子ども一人ひとりのありのままを受け入れながら、柔軟な時間設定やルールのもとで保育を進めてきたことが一因になっている可能性があると考えられる。こうした力を育成するために、今後はより日常の遊びや保育活動においても、ルールの設定や時間の使い方を見直し、子ども同士の対話や折り合いの経験を豊かにするような教師の支援を工夫していく必要がある。この貴重な情報交換のおかげで、本園の今後の保育における具体的な課題点が明確になった。幼児期の「科学する心」の育成は、小学校教育への円滑な接続を図る上でも重要であると感じた。



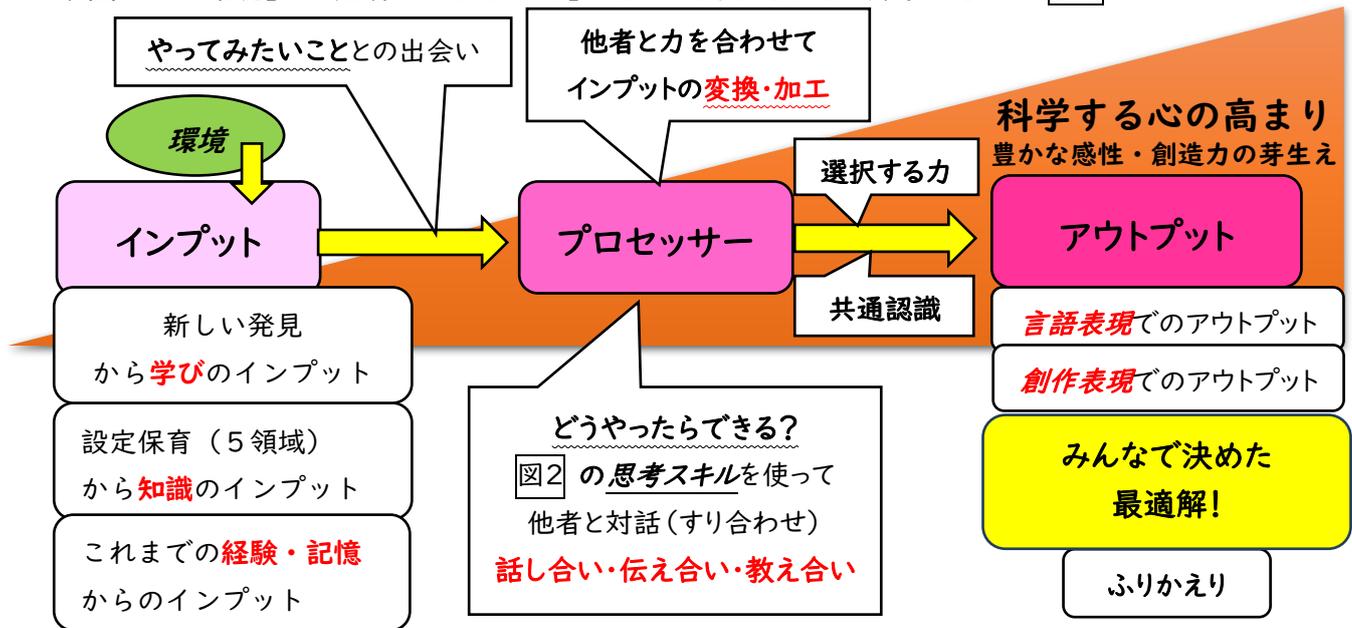
VI 全体考察

本研究では、昨年度の実践を振り返り、子どもの姿を改めて言語化することで、当時の学びや思いの深まりを再確認することができた。今年度は、その姿をさらに整理・分析するための視点として、幼保小中合同研修会で南方小学校校長から紹介された「思考スキル」を取り入れた。本論文で扱った実践の中にも、これらの思考スキルが随所に表れており、その内容を図2に示した。

本園での遊びの中で見られる思考スキル 図2

思考スキル	子どもの見方・考え方	教師の支援
比較	<input type="checkbox"/> ~と~を比べてみると <input type="checkbox"/> 同じところ、違うところ	<ul style="list-style-type: none"> ・変化に気づけるような問いかけ ・様々な違いのある素材の準備
分類	<input type="checkbox"/> 同じ仲間に分けると <input type="checkbox"/> まとめてみると	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ特性に気づけるような声かけ ・分類して片付けられる掲示の工夫
多面的	<input type="checkbox"/> 友だちの意見を参考にすると <input type="checkbox"/> 図鑑や ICT 機器で調べてみると	<ul style="list-style-type: none"> ・思いを表現できる場づくり ・調べたくなる環境づくり
関連付け	<input type="checkbox"/> これまで学んだことや 知っていたこととの繋がりは…	<ul style="list-style-type: none"> ・子どものこれまでの経験が活かされる道具や素材の選定
順序立て	<input type="checkbox"/> どの順番で考えるか <input type="checkbox"/> 優先されることは何か	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しがもてるスケジュールづくり ・優先される事項の確認

本園での「環境」と「他者とのかかわり」によって動かされる“科学する心” 図3



本研究における「科学する心の高まり」を「環境」と「他者とのかかわり」の視点から、インプット・プロセッサー・アウトプットのステップで図3のように表現した。子どもは環境との出会いを通して新たな気づきを得る。その気づきは、これまでの知識や経験と結びつき、「やってみよう」という主体的な意思へと広がっていく。その後、他者とのかかわりを通して、「どうやったらできるか？」という問いを立て、対話的に思考を深めていく。ここでは、図2の「思考スキル」を使って子ども同士の協働的なやりとりや、試行錯誤する姿が見られる。こうした過程を経て、子どもは選択する力を発揮しつつ、自らの思いや考えを言葉や造形などの形で表現し、「みんなで決めた最適解」へとつなげていく。この一連のプロセスを通して、子どもたちは豊かな感性と創造力の芽生え(=科学する心)を育てていった。

今年度の取組から次のような成果と課題が見られた。

- 昨年度の実践報告を再び考察することによって、より深く子どもの思いや意図、感情の揺れを丁寧に読み取る機会となった。
- 子どもたちの卒園後の姿を追って、小学校と連携して情報交換を行ったことで、現在の子どもの姿から「科学する心」の研究の成果と今後の課題が明確になった。また、昨年度育ててきた子どもたちの心を小学校でも大切に育ててほしいという願いを伝えることができた。
- 子どもが他者とのかかわりの中で自分の気持ちを調整する力は重要である。しかし、今回の1年生の担任との情報交換の中で自己調整や感情コントロールの未熟さが課題として浮かび上がった。そこで今後は、より日常の遊びや保育活動においても、ルールの設定や時間の使い方を見直し、教師側が子どもの自己理解と他者理解を促す支援の研究を行っていく必要がある。その中で子どもが自らの感情に気づき、他者の存在を意識しながら自分の気持ちを調整する力を育てていきたい。

VII 今後の方向性

本園は、今後も子ども一人ひとりの思いや感情を丁寧に受け止めつつ、仲間と共に考え、感じ、話し合う過程を大切にしたい保育の在り方を追求していく。そのための具体的な取り組みとして、①保育の中での対話の場の設定 ②小学校との継続的な連携 ③教師間での振り返りと研修の充実に力を入れていく。幼児期に育まれた「科学する心」が子どもたちの未来につながり、これからの時代を生き抜く力になるよう、今後も教育・保育の充実を図っていきたい。

【研究代表】甲斐 朱観 【執筆者】松浦(上原) 唯

【研究同人】林田 優 清藤 佑香 坂本 良渚 高山 めぐみ 森 美智恵